

青聾良くしたい 7月 8月 頑張ること
自分の短所を直そう

「私が先生になったとき」という作者不詳の詩を、長くデスクマットに挟めてある。自分への戒めに……。初任者研修や赴任先の学校で教職員に紹介している。青聾に赴任した時、校長室だより1号にも掲載した。こどもたちのことを一番に考える教師になろう。誰でもそう思って 熱い気持ちを抱いて教師となる1日目を過ごすものだ。

教師になって、日々を過ごすうちに、人間は弱い生き物なのでこどもたちのことを一番に考える気持ちよりも、無意識のうちに保身に走る。授業が下手である、仕事がうまくいかない、生徒たちに信頼されていないのではないかという不安は、様々な形に姿を変え、自分を守ることが先になる。教頭時代に出した通信に東京学芸大学 児島邦宏 名誉教授の「腕をあげよう」という文章を載せた。裏面に掲載するのでお読みください。

教師は授業がすべてである。本質ができると他の教育活動も可となる。

その本質に向き合って自ら成長しようとする教師は、こどもの学びへの熱意を呼び起こしこどもと共に成長していく。逆もまた真である。

～自分の短所を直そう～

こどもたちが考えた「青聾良くしたい」7月・8月 頑張ることである。玄関に掲示されている目標を目にして動揺する。こどもの真っ直ぐな気持ちに、大人は冷水を浴びせられた気分になる。

大人たちはどんな思いで、この目標を目にしたのだろう。

実習を終えた後の感想には、できなかったことがしっかりと振り返られていた。

- ・お客様に場所を聞かれた時にパニックになってしまいうまく説明できずに他の人に頼ってしまった。
- ・挨拶することはできたが、返事の声は小さかった。
- ・話を聞いている時に途中で分からなくなってもはいと答えてしまった。等等素晴らしいことだ。きっと次に生きる。

一学期、本校の教育活動にご理解、ご協力ありがとうございました。長い休みに入ります。一学期の頑張りをほめていただくと共に、休み中、年齢に合わせた自己管理ができるよう励ましていただければと思います。8月19日 月曜日、事故・非行等なく元気な笑顔のこどもたちに会えることを願っております。

「私が先生になったとき」の最後の一連です。自戒を込めて……

私が先生になったとき
自分のたたかいから目をそむけて
子どもたちに勇気を出せと言えるか

※大人も成長する夏にしたい
ものです。